



# 総題 「ローマの信徒への手紙」における贖い

アドベンチスト聴覚しょうがい者友の会教務部

第 8 課 ローマ7章で述べられている人 森 博光 2010, 8, 14~2010, 8, 20

はじめに 8月14日(土曜日)

ローマ7章は多くの論争〈意見の食い違いを述べ合う〉を与えているようです。これはパウロの回心前の経験だとか、回心後のものだとか。むずかしいテーマです。しかしガイドは「どの立場をとるにせよ、重要なことは、イエスの義が私たちを覆うこと、また私たちがイエスの義によって神の前に完全な者として立つことができるということです。」と語ります。今週の学びは、この確信が深められる最も重要な章ではないかと思いました。

1. 何につながる？ 8月15日(日曜日)

この7章はキリストに属しているという人に対して「律法」がある理由を問い直しています。特にユダヤ人でクリスチャンになった人々は、今まで身につけてきた律法とどう向き合うのか、これまでのように厳しく守るのか、あるいは完全に無視してもいいものか、大きな問題でした。パウロはこの「結婚の例話」を通して、「復活したメシアと結婚し、…実を結ぶように」そして「ユダヤ人が今や古い犠牲制度を捨てる自由を持つこと」(ガイド)を彼らに勧めています。それは正しい律法に対しては「正しい関係」に立つことが必要だったからです。間違った関係とは、律法を救いの手立て〈手段、方法〉にすることです。律法をことごとく「守らなければならない」「ねばならない」と、ねばねばからみとられると信仰生活の喜びお消えてしまいます。いとひき納豆みみたいな信仰生活に本当の解放と喜びはないからです。

2. 律法は罪か 8月16日(月曜日)

「しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。たとえば、律法が『むさぼるな』と言わなかったら、わたしはむさぼりをしなかったでしょう」(ローマ7:7)。人間は「だめだ」「してはならない」と禁止されればされるほど、従順に従うよりは反抗心や好奇心が刺激されて、罪や悪事を犯してしまうものです。

副読本に父親と息子のゲームの話があります。「ラリー、十まで数えるから、数えている間笑わないでね」というと、すぐ息子はその気になった顔つきをします。それから父親が数え始めます。「いち、にーい……。三を数えるまでに、息子の顔はニヤニヤし始め、五を数えるころには息子は立ち上がり、ほら、ラケラ笑ってしまいました。ゲームでなかったら、簡単に十秒間笑わすられるのです。しかし、笑ってはだめだよと言って息子の注意を呼び起こすと、ちょっと笑いを抑えることができなかったというのです。

この話でわかりますね。だから律法は罪ではありません。律法が悪いわけではないのです。本当は律法は神の御心を示す聖なるものなのです。善いもの、霊的なものなのです。律法が与えられることによって、罪の正体がむきだしにされるのです。律法は鏡のように、戒めを守ることのできない私たちの惨めな姿を映し出すのです。そして否応なく〈事情がどうであっても〉自分ではどうしようもないあなたの罪を自覚させるのです。そのようにして自分の罪深さを映し出されながら、福音の力により頼むように導かれるのです。

3. 聖なる律法 8月17日(火曜日)

キリストを信じて、思い煩い、思い悩みはなくなる。そのように期待したけれども、まったくそうではなかった。むしろ、思い煩うことが多くなった。そのように言った人がいます。信仰を持つことで、思い煩いが多くなったというのはどういうことでしょうか。その人の信仰が足りないから、間違っているから……。そうではありませんね。月曜日で学んだように律法は罪を知らせるものだからです。ガイドに「肉の人」という表現が出ています。

罪に支配されている人間、罪人ということです。教会に来ると、罪人呼ばわりされて、不愉快な思いをした、そうおっしゃる方がいます。特別に悪いこと、犯罪をしたこともない、罪を犯したこともないのに、罪人だ、と言われる。パウロが自分のことを「肉の人」と言っているように、クリスチャンも、だれもが罪人なのです。聖なる律法の前にはすべての人間がそうなのです。

そして人間は遂に、この律法を本来の姿で受け(罪の自覚)、神の祝福に与る者となることはできませんでした。しかし恵みの「聖なる律法」を、その本来の姿のままに受け入れる道が開かれました。人となられた神の御子がその道を開いて下さったのです。

#### 4. ローマ7章の人 8月18日(水曜日)

ローマ7章はすべての人々に向かって、心を裸にしたキリスト者のことばです。だれか他人に向かってこういうことばを言い得るでしょう。恥ずかしい思いを振り切って捨て、自分のおぞましさ(おろかしさ)をありのままに語っています。このローマの信徒への手紙を学びながら不思議に思うことがあります。それは6章では、クリスチャンになった時に「罪から解放された」と言っているのに、7章になると、「私は罪の奴隷となっている」とパウロが言っていることです。いったいどちらが本当なのか。答えは「その両方」です。根本的に罪から解放されたのは事実です。もう私たちは罪のために死ななければならぬことはありません。神の恵みにより新しくされた今、神を愛する者となったからです。しかし、私たちは、そのことによって神を愛し隣人を愛することができるようにと罪から解放されたにもかかわらず、その愛の足りなさ、行いの足りなさがあまりにも重くて深いものなので、自分の足りなさを思う時に「私は実に罪の奴隷だ」との思いを持つのです。

心のなかで、神に対する態度や信仰は変わったけれども、今までの生活習慣の問題もあるし、心の未熟さもあるし、いろいろな点において成長しなければならぬところがいくらかでもあるのです。神の栄光を表そうと真剣に考えるときこそ、自分の足りなさを深く感じるのです。忠実に神にもっと従いたい、神の御名のために実を結びたいという心が深まれば深まるほど、自分の足りなさをもっと感じるのです。それがこのローマ信徒への手紙7章の心理的な背景になっているのです。

#### 5. 死から救われる 8月19日(木曜日)

「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身お心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。」(ローマ7:24、25)。パウロの絶望は、叫びは、ここで頂点に達します。罪へと誘う欲望、そして死に定められたこの体、それをどうすることも出来ない、と。「だれがわたしを救ってくれるでしょうか」。悲痛な叫びです。困り果てた、絶望しきった人の姿がここに 있습니다。「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。」しかし突然に絶望を突き破って讚美に至ります。そこまで苦悩したかゆえに、赦してくださいる方の懐に抱かれるのです。

私たちはとことん自分に破れていいのです。偽善者であっていいのです。とことん惨めさを味わっていいのです。いや、むしろ味わわなければならぬのです。惨めでなければ、私たちは、神様を、救い主を、必要としないのです。「心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。」こんな偽善者でも神は愛して下さるのです。葛藤(心の乱れ、もつれ)のない、惨めさのない、クリスチャンの生活は、本当のクリスチャンの生活ではありません。律法を守ることが出来ない、と嘆くものに与えられるのが無条件の恵みによる救いです。「私は惨めな人間です！」ここから信仰の歩みが始まるのです。ここから感謝が始まるのです。主はこれからも、どんなときにも離れずに居て下さいます。私たちは立派でなくても、神の恵みによって赦され、強められ、すばらしい証し人とされるのです。今期のガイドを通してそのような主に会われますように。